

## 校長室から応援メッセージ(その2)

令和5年6月16日(金)

「いつの間にか私は・・・」

皆さん、こんにちは。前期授業もあと1か月です。夏を制する者は入試を制す、と言われていますが、きっと夏前の今の時期から助走をつけておくともっといいのでしょう。しかしそうやって前倒しにつぐ前倒しで、みな一様に忙しい思いをしている、それが今の社会ではないか、私はそう思っています。

ここは一つ思い切って立ち止まり、あらためて目の前のことに気持ちを集中させる、そういう基本に戻りましょう。未来に対する不安は引き出しにしまい(前にポケットと言ったので今回は引き出しです)、まっさらな気持ちで机に向かう。夏が来ても秋が来てもいつもマイペース、というより予備校ペースがいいですね。

ところで、皆さんは驚くかもしれませんが、私にも高校時代がありました。46年前、高校3年生だった私は、学校の授業そっちのけの受験生でした。最後の模試で志望校〇〇大学合格可能性5%未満、5%未満とは随分丁寧に判定してくれたものです。私は5%未満が4、99...%なら20回受ければ1回合格できる、それはおそらく今年なのだ、と思い込み、その結果、某予備校に入学しました。

一転して予備校では授業に合わせた勉強を大事にしました。予備校に通い、当たり前のようにしていればいい。次から次へと湧いてくる雑念は無視。何かうまい方法はないかと藻掻くのは悪循環に陥ります。ひたすらテキストや問題集に向かうのです。部屋の机の上のラジオだけが友達でした。

「白いページの中に」という歌が流行っていました。「いつの間にか私は」という出だしの部分がとても印象的で、ここだけ口ずさみながら(もちろん心の中で)予備校に通いました。そしていつの間にか大学生になり、いつの間にか高校の教員になり、そしてもうくだいなのですがいつの間にか予備校に戻ってきていました。

「いつの間にか私は」。この言葉はいつの間にか私の心に座右の銘のような顔をして居座っています。どんな時もその時々自分に徹し、その積み重ねのうちにいつか振り返った時、とても深い感慨が生まれている、それが人生の節目ごとの真実だと思います。皆さんは今、予備校生の姿勢を貫いてください。将来いつの間にかこんなに幸せになってしまっていた自分にきっと驚き、そして感動します。そう信じて受験まで、まだまだ長いこれからの道のりを無心で駆け抜けてください。その姿を私は静かに見守っています。